

都島だより

発行責任者

明見 和彦

〒371-0055
群馬県前橋市北代田町156-5
TEL 027-232-5084



(社)浪速工業会
関東支部会報

2009年(平成21年)11月 第40号

事務局 馬江 治喜

〒234-0056
横浜市港南区野庭町696-6
TEL045-841-8885
E-mail nanium@c3-net.ne.jp

題字デザイン 岡田宏三

NEWS40号

関東支部・現在会員数 ◆ 合計515名

◆M・機械108、ME・機械電気19名◆A・建築94名◆E・電気・電子工学165名◆C・土木・都市工学48名◆C I・工業化学・理数50名◆L・普通12名◆工専19名

2010.1.22 (金)

関東浪速工業会

新宿住友ビル47階

平成21年度
総会のご案内

申込締切 平成22年1月10日



交通のごあんない
JR[新宿駅]より 徒歩8分
東京メトロ丸ノ内線[西新宿駅]より 徒歩3分
都営地下鉄大江戸線[都庁前駅] 直上



東京住友クラブ

にて開催

- 親睦会費 8,000円(女性会員は4,000円)
平成年度卒業会員は無料!
- 同封の返信はがきに出欠をご記入の上
必ず投函して下さい。
- 日時 平成22年1月22日(金) 18時~20時30分
- 場所 東京住友クラブ
新宿区西新宿2-6-1 新宿住友ビル47階
TEL:03-3344-6285

恒例!
大抽選会開催

是非ご参加ください

昨年度の総会御出席者

来賓	講手理事長	来賓学校長
機械科 M14松原 滋 M33白石勝三 M42前田範行 12名	M26上田英雄 M36西村 功 M42山口忠雄	M26玉城元一郎 M28橋本健治 M37小梅伸人 M38猪川 隼 ME40松本良治 清水一三雄先生
建築科 A25西阪 勲 A37森 芳信 A57信原利行 9名	A27清井英治 A44水守恵子	A28酒井 保 A29森 正信 A46三澤龍夫 A46袖木寿雄
電気科 E18/9平野榮一 E29川村栄男 E36赤尾仁史 E36馬江治喜 14名	E20真鍋静夫 E29吉田 進 E36安部昭俊 E36竹村繁幸	E25佐々木寛 E32平井義雄 E35田中 浩 E36石垣英明 E36笹治博司
土木科 C18/9大倉 馨 4名	C20榎本嘉信	C24土谷 覺 C33明見和彦
工業化学科 CI32佐々江延宣 CI39藤田 忠 7名	CI32松井駒治 CI40菅家亘通	CI34柴田孝次 CI38岩井 誠(本部副理事)

参加者は46名+来賓2名 合計48名でした

E36

石垣英明氏



祝受賞

国際協力賞を受賞

本年5月15日に京王プラザホテルで開催された第41回世界情報社会・電気通信日の記念式典において、都島工高電気36年卒の石垣英明君が日本ITU(国際電気通信連合)協会より、国際協力賞を受賞いたしました。当日の受賞の様子はNHKのニュースでも放映されました。この受賞は石垣君の長年にわたる開発途上国に係わる国際協力業務に従事した功績が国際電気通信連合によって認められた結果の表彰です。そして同期の我々にとっても大変めでたい事でお祝い会をしようという事になり細川君にお祝い会の会場をお願いし、東京渋谷の東京電力のクラブで7月11日に開催しました。電気科36年卒の関東在住者で構成する「E36会」メンバーのほとんどが出席し、また、遠路大阪より佐治君が多忙にもかかわらず、

1面より

わらず駆けつけてくれて、総勢10名で盛大にお祝いを開きました。まず石垣君より受賞の経過及び功績内容を発表してもらい、その後、出席者各自のお祝いの言葉と近況報告を順次話しました。お互い年齢は66歳から67歳となり、各自いろいろな悩みを抱えながらも、精一杯元気に生きていることに喜び、平凡な幸せを感じているとのスピーチがあり、大いに話が盛り上がりました。あつというまの三時間でした。都工を卒業して来年で49年となりますがこのように同級生のためたい受賞を共に分かち合おうと言う趣旨のパーティは初めてで、多くの同級生が集まって盛大にお祝い会兼飲み会をとりおこなう事ができたことを感謝いたします。お互い健康に気をつけてこれからも強く元気に明るく生き抜くことを誓いあい、近いうちに再会する約束を交わしてお開きになりました。

馬江記



受賞祝い懇親会にて

母校空襲罹災の記

〔昭和二十年六月七日〕
〔四十四年目の役者〕より抄録



M21 金田 龍之介

〔最終回〕 Mニュース専号からの書き

八月十四日朝、学校への連絡事項で、一人で都島工業まで帰って用件を済ませ、又徒歩で京橋から日本橋五丁目の松坂屋へ帰る道で空襲警報になり、省線電車のガードの所あたりで「敵機来襲」になった。通行人たちは省線のガード下に避難したが、私は逃げ遅れて道端の道路わきの防空壕に飛び込んだ。結果的には、それで助かった。省線のガードには

直撃弾が落ち、薄紫色の溶接のスパークのような光線が爆発音とともに走った。ガード下の壁が、吹っ飛んだり、傾いたりして悲惨な情景となった。空襲後に防護団も駆けつけたが、この阿鼻叫喚の姿は、あの光線の光とともに今も焼きついていて、大阪砲兵工廠を狙つての空襲であつたが、命拾ひをした私は一目散現場を走るようにして松坂屋の工場へ向かった。現在も京橋駅南寄りの所に、その空襲でなくなった人たちの慰霊塔が建てられている。

十五日の朝は晴れていた。集合したときに「本日正午、天皇陛下の玉音放送があるから松坂屋一階の書籍売場に集合するように」と担任の平田先生に云われた。やがて、正午近く各クラスごとに整列した。雑音が激しくブルブルという中で、陛下の玉音が生まれて始めて聞こえて来たが、何をおっしゃっているのかさっぱりわからなかった。やがて放送が終わり、みんな職場に引き返して行った。

「どうせ国のために死ぬ」というてはるんやで」と瀬戸や何人かの仲間と喋って笑いなから歩いた。隣の組の正田君が「忍びがたきを忍びうたら、戦争やめよう言うことやないか、ほな敗けたんかいな」とちよつと聞き取つただけの内容をもとにして推理した。

「ええ」ということになって私は慌てた。松坂屋地下の工場においていくと、女子挺身隊達は、みんな、仕事場の机の前に座つて泣いていた。だんだん声が大きくなって、ごうごうという泣き声になった。私も悲しくなつて泣き出した。横にいたクラスの仲間も大半が泣いた。松坂屋の裏に高射機砲隊銃があり、隊長の中尉が中尉か、眼鏡をかけた若僧だったが興奮し、抜刀して、「戦争は終つたらん、負けたんじやない」と怒鳴りながら走つて行った。狭い所で機材なんか置いてある細い道を、抜刀して走り回るので、危なくて仕方がなかった。全員作業服を学生

服に着替えて整列し、隊伍を整えて一組づつ工場から出て行った。松坂屋の前で集合し、平田先生が「とりあえず、明日、登校するよる」と決めてから全員解散した。由良家に帰ると、お父さんやお母さんも、力が抜けたようなホツとした様子であつた。その夜、お父さんが「もうこれ取りまひよや」といつて電燈につけてあつた黒い燈火管制用のカバーをはずされた。昨夜までの警防団のうるさい燈火管制が嘘のようであつた。

翌日も何やら、力の抜けたような晴れた日だつた。学校へ行つたら全員集合して平田先生から「追つて沙汰あるまで休校する」という話があつた。

「金田さん、どないしはるのん」とお母さんがたずねた。「学校も休みになつたし、いっぺん岡山へ帰つてきますわ」

「そう、そないしはる」
「また帰つて来ますけど、えらいお世話になりました」

「いやいや、何もできまへんでしたがな、まあ気をつけて行きなはれや」

「はい」
「そのうち玉も帰つて来りますやろ」お父さんは何気なく言つた。私は由良家を去つた。大阪駅から無理に乗り込んだ汽車は、超満員であつた。リュックサックの中には、家の焼け跡の防空壕で掘り出した瀬戸物の皿や、茶碗が入つていた。罹災する前に、座敷の下に掘つた穴に父が不用の瀬戸物をいっぱい放り込んでおいた。それを岡山へ帰るにつれて焼け跡へ行つて掘り出して来た。次から次と見おぼえのある皿や、小鉢や、茶碗などが出て来た。何もない家には土産になるだろうと、重たいのをに入れて持つて来たのだ。姫路までの汽車だったので、焼けて青天井のプラットホームに立っていると「金田さん」という若い女性の声が聞こえた。そつちを見ると、また「金田さん」とその女の子は私の名

前を呼んだ。見ると久保田鉄工所にいた時、労働課にいた、桜草の須田嬢と一緒に働いていた眼鏡をかけた色の浅黒い顔色をして、ちよつと唇のふあつい宇都と云う女の子であつた。髪の毛がくしゃくしゃになつていて、不思議な魅力があつた。

「戦争負けたね」と彼女は言つた。
「負けたね……。」

「あの子はいかんな事したねえ、須田ちゃん、空襲で亡くなりやつて」
「そやつたなあ」

「これからどないなるんやろね」
「わからん」

「わからんね、大阪にいても何や、怖いさかい、田舎へ帰る思うてね、姫津線やね、うち」
「僕は岡山まで行くね」

ホームは大混乱していたから、これだけしか話せなかつた。
「お元気でね」

「君もなあ」
もう二度と逢えないんだらな。

「ほな、さいなら」
「さいなら」

宇都さんは手を振つて、リュックを担ぎ直すと、汽車の方へ走り去つて行った。私は知っている人と別れる時、とてもつらい気持ちになる癖があるのだが、
「さあ、僕も岡山へ帰る。みんな待つとるやろ」
と、ふり切るように元気づけて、山陽線のプラットホームに向かって歩み出した。まだうだるような暑い夏の昼下がりであつた。(完)

「母校空襲罹災の記」の連載は今回で終了となります。三月三十一日逝去された金田龍之介さんの御冥福をお祈り申し上げます。この全文をご希望の方は事務局までお申込ください。

剣道の思い出



C18 秋月 勝美



私が剣道を始めたのは、都工に入学してからである。入学したのは、昭和13年4月で、日中戦争が始まり、同盟国のドイツから、ヒッラーユウゲント(ナチス党首、ヒットラーの青少年親衛隊)が、来校された年でもあった。当時学校は、武道の科目が義務づけられており、剣道か、柔道を選択する事になっていた。剣道を選択したのは父の強い意向もあったが、私の体形も剣道に適していた為だろう。父は熊本県八代市の出身で(私も当地出生)、熊本は剣豪宮本武蔵の終焉の地でもある事から、剣道を薦めたのだろう。参考までに、八代市出身の最近の知名人は、歌手八代亜紀、野球の秋山選手(ダイエーで引退)、教員出身力士智の花(引退)、悪名高いオオムムの元教祖麻原(松本智津男)等の人達である。

剣道道場は本館地下室に有り、中央通路を挟んで反対側は柔道場があった。高学年になってからだが、剣道の稽古に飽きて来ると、冷やかしに行ったものである。道場の床は何故か、周囲を幅1m位残して、全部30×40cm位下がっていた。後から判った事だが地下室の為、床より天井までの高さが低いので、床を下げないと竹刀の高さが低いため、改築したそうである。それでも、長身の先輩達が大勢居られたのか、天井には、竹刀の傷跡が無数に付いていた。壁には、名札の掲示板が取り付けられており、先生の名前と、卒業生、在校生の段位別に名札がぶら下がっていた。当時段位は級から始まり、3級〜1級、初段、2段と進み最後に6段(錬士)、7段

(教士)、8段(範士)で終っている。又段位の表示は、面紐の色別で、級は茶色、段は黒色と定められており、剣道用具は、剣道着、袴、竹刀、は自己負担、防具は学校の備品を使い、稽古に励んだと記憶している。有段者になると校章の入った黒皮の胴の使用が許され、先輩達の凛々しい稽古姿に憧れたものである。剣道の授業は原田先生を筆頭に、上村、松本、菊池の各先生から受け、剣道部員の稽古は放課後、夏休みの暑中稽古、冬休みの寒稽古、と定められており、稽古は先生を交えて先輩達にお願いするのだが、先輩達の指導は(特に6年生)筆舌に言えない猛烈なものであった。剣道の勝負箇所は、面、小手、胴の3箇所であるのだが、私も、突き(喉)を食らって怪我もしたし、正規の面を取られても身長の違いで後頭部を叩かれ、脳震盪を起こした記憶がある。他に辛く思ったのは寒稽古であった。朝の早いせい、前日に着た稽古衣が乾いておらず、凍る寸前のものを、寒さを我慢して着たものである。(自己管理が悪かった)然し稽古が始まれば、稽古衣から湯気が出る程汗を掻き、終われば下着を取替え、さっぱりした処で太田食堂で出してもらった「ぜんざい」の味は、今でも忘れられない。入学当時、剣道部に入学した大勢の人達も、猛稽古に耐えられず、次々と脱落。最高学年の頃には、根性のある10名以下の者達が残っていたと言っている。当時のパターンで有ったが、現在もその傾向であるらしい。当時使用していた正規の竹刀の他に、素振り刀と、小太刀があり、素振り刀は、刀身の径が約10cm?もある竹製の、お化け竹刀で、重さは竹刀の3〜4倍位あったのではないだろうか、稽古前か試合前に素振りをすれ

ば、普通の竹刀を握ると、大変軽く感じるので、愛用したものである。現在でもこの品物が有るのか定かでない。小太刀は竹刀の長さを、短くしたもので、当時、宮本武蔵の二刀流(二天一流)が流行し、先輩達が二刀流で、後輩を相手に稽古をされていた。私も高学年になってから、面白半分にやってみましたが、餓鬼の頃の「チャンバラ」遊びをやっている気分、面白くなく辞めてしまった。剣道用具の備品に、日本刀が有り、居合用の刀は付けていなかった。静まった道場で、居合の形を(流儀記憶なし)、先輩に教えて頂きながら、居合道とは、「目にも止まらぬ抜き打ちで、敵を切倒す技である」と叱咤され、稽古に励んだ思い出は、忘れられません。



〔次号に続く〕

見学会
日産横浜エンジン工場
見学会報告

M36 西村 功

三年ぶりの見学会を7月9日に明見会長他15名が出席し、日産自動車横浜エンジン工場で開催しました。まず会議室で工場の概要説明を受け工場見学に移りました。ロボットと作業員の分担がうまく組合せられどみなく完成品となる流れに現役時代の製作工場と隔世の感があることに時代の違いを感じました。工場見学の後はエンジン博物館で初代のエンジンから現代に至るまでの実物を見学し、ミニチュアの展示では古い車のモデルを見ると、これは子供だけではなく大人も喜ぶ品揃えと感じます。見学終了後の質疑応答の時間では、今最も興味

のあるハイブリッド車や電気自動車の開発に話題が集中し、名残惜しくも工場を後にしました。本工場は生麦に近いことから、帰途キリンピヤビル内にあるピヤホールで出来立ての生ビールを傾けながらの懇親会となり、付録付きの有意義な見学会でありました。



日産横浜エンジン工場にて



ロボット化

M16 若狭 仙治

先日関東浪速工業会で日産自動車の横浜工場を見学した。二十年程前、会社勤務中は時々訪問していた。当時の量産エンジンは組み立てラインは長さ四十米程の自走コンベアラインの初工程で、母体のシリンドアブロックを取り付け、次々の工程で各部品が取り付けられる。数十名の作業員が時間中、黙々と同一作業で部品を取り付け、最終工程のコンベアから完成エンジンが取り出される。一般見学者もエンジンの製造過程を見て大いに興味を高めた様だ。ところが、今回は地上五米ほどの見学通路から下を見下ろすと三十米四方の大広場に二米角位の小部屋がぎっしりと並び、各小部屋間は自走コンベアで次工程の部屋に運ばれる。昔の部品取り付けは今日、各小部屋内でロボット化で取り付けられ、全作業者は数人の監視者のみであった。私はエンジン組み立ての近代化技術に大いに感銘したが、一般見学者は外見的に内容不明確で、興味が沸かなかつたのではないだろうか?



C33 明見 和彦



陶芸会に参加して

10月3日(土)に開催された青葦会恒例イベント「陶芸会」にC科より参加しました。国立駅に集まったのは青葦会5名と他科4名の計9名でした。C科の私も参加出来るって事は? 「青葦会の行事が関東浪速工業会の継続と発展に程よくマッチし一役を担っているんだな」と私なりに感じながら青葦会の存在をありがたく思いました。当日は秋風が寄り添い気分も最高でした。駅より並木道を1km程歩く。並木道から右へ曲がると間もなく「ここがA46 楠木寿雄氏の自遊工房アトリエです」とメンバーの一人が教えてくれた。そこは何とビルの地下です。でも窓からは外の植込みが見え、木の葉が風になびいています。工房の中を見ると意外にも若い陶芸家の姿が目に入る・・・しかも美人だ。陶芸とは陶磁器の芸術? 何しろ芸術に関する事は無知である私は、只怖いもの知らずで初参加した次第です。これでもいいのかなあと感じながらも工房に入った時すぐ私の名を呼んで頂いた気さくな楠木先生のご指導で何とか作業台で土との格闘がスタートしました。当日の工房でのレクチャーにて、ここの工房の窯は二重窯で湯呑み300個を飲み込み、温度は1200度以上まで上がるそうです。また日本古来の焼き物と分類されるものには、信楽焼、常滑焼、備前焼、瀬戸焼、丹波焼、越前焼があるとの事で、これだけは覚えめました。収穫です。しかし土の作品をひとつ仕上げるとは、何しろ難しいです。制作中もずっと見守ってくださった高橋先生のおかげで、気が付いた時には作業台で4時間も無心に粘

土と触れ合ったのでした。こんなに熱中したのは70年間で初めてかなと感じました。終了後は場所を移して懇親会に入り仲間と楽しい一時を得ました。青葦会では毎年の楽しい季節の区切りとなっていた様子で、今年で10回を数えることになったそうだ。楠木氏は、この日のブログに「人様が喜びリフレッシュ出来る場を提供する事が最近僕個人の喜びになっているのをつくづく感じる」と書かれています。粘土よ、お蔭で私の手がツルツルになりました。明るい陶芸教室ありがとう。



陶芸会にて

青葦会

小江戸川越散策

A45 高橋 健司

秋晴れの10月31日(土)、関東青葦会のもう十年も続くと聞いている例会は、NHK朝ドラ『つばさ』の舞台、埼玉県川越の蔵造りの町並み散策でした。紅一点、土木、工業化学卒の方も含め昭和25〜昭和57年卒の総勢14名で、仙波東照宮・喜多院・川越市博物館・時の鐘・菓子屋横丁・蔵造り資料館・松本醤油商店と江戸、大正浪漫的建物、町並みを満喫し、後はより親交深まる飲み会で川越の夜は更けていくのでした・・・因みに万歩計では15481歩、9.28kmの心地よい運動でした。皆様お疲れ様でした、幹事の森様・信原様ありがとうございました。



小江戸川越散策 参加者14名

チェロ・コンサートに参加して



E36 馬江 治喜

10月25日(日) 東急田園都市線の青葉台駅前にあるフィリアホールで、A38年卒の岩井浩一氏がチェロのコンサートに出演されるという事で、有志の会員が出席しました。開場前にすでに200名以上の人が並んでいて、開演時にはほぼ満席の状況でした。ホールはプロセニアムアーチのないシューボックス型という形態で、クラシック音楽を主目的に設計された500席のコンサートホールです。構成は三部構成となっていて、岩井氏は第二部に出演されました。私としては久しぶりのコンサートで本心に心が落ち着き豊かな気持ちになりました。終了後出席者の有志で近くの飲み屋へ行き、岩井氏より発表会の裏話、苦労話などをお聞きして散会となりました。



フィリアホール

ピースボート旅行記

C139 馬場 義甫

ピースボートとは国連の特別協議資格を持つ、1983年に設立された非営利の国際交流団体(NGO)です。これまで26年の間に世界180以上の港を巡る国際交流の船旅をコーディネートし、のべ参加者数は4万以上で、平和活動のために自主的な運営を行っています。船旅の実際の運営は、ピースボートがコーディネートし、旅行企画、実施は株式会社ジャパングレース(旅行代理店)そして船を運航する船会社の3社及び乗船客(いろいろな企画に参加)によりなされる。私が申し込んだのは4月8日〜7月19日まで106日間の66回ピースボート地球一周の船旅でした。66回は北欧・北極圏の北回りコースで寄港地21カ国の予定

訃報

C23年卒 佐々木 理一氏 平成20年
A16年卒 鶴海 吉正氏 平成20年12月
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

次号のMニュースは平成22年5月発行予定です。



オセアニック号



船上にて

地球一周の船旅 PEACE BOAT

【次号に続く】